The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『享楽主義者マリウス』におけるインターテクスチュアリティとその時間性
Author(s)	玉井, 暲
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1989, 23, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47861
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『享楽主義者マリウス』における
インターテクスチュアリティとその時間性

玉井　暲

1

ウォルター・ペイター（Walter Pater）の長編小説『享楽主義者マリウス』（*Marius the Epicurean*）（1885）の第5章「黄金の書」は，「キューピッドとサイキの物語」と題する物語の30ページにもわたる長大な引用でもって終わっている。この小説の主人公マリウスは，ピサの学校に学ぶ少年であったころ，生涯にわたって大きな影響を与えつづけたとされる決定的な本に出会うのだが，この「黄金の書」とはいかなるものかを，ここで，その引用自体でもって示しているのである。次の章は，この引用を直接受けたかたちで始まる。その冒頭の文章はこうなっている ——

> マリウスの記憶に残った〔アプレイウスの〕有名な物語はこのようなものであった。ただ，その印象はいくらか原作と異なり，全体として荘重になった。[1)]

この叙述はわれわれ読者にいくらかの当惑を与えずにはおかない。それは，今われわれが読んだばかりのあの長々と引用されていた物語は，原作から直に書き写されたままの現実のテクストだと了解していたところ，それが，一登場人物の記憶が捉えたかたちのままのテクスト，つまり記憶・印象の世界に移し換えられているという点でいわば幻のテクストだと新たに教え

られたからである。[2] この引用テクストをいずれと捉えればいいのか決めかねている，そんな動揺状況にわれわれはいま立たされているのだ。

あの長大な引用「キューピッドとサイキの物語」は，作者の確定した，出典も明らかなテクストであったはずである。引用に先だって，この小説の語り手が「アプレイウスはすぐれた文学的才能を集中して，あまたの楽しい昔話のまだ定着しないで星雲のようにただよい流れていたものをかき集め，ここに一つの物語として結晶させた」（第５章：Ⅰ，61）と述べるコメントが置かれているから，これに基づいて，作者はアプレイウスだと理解することができる。アプレイウス（Apuleius）とくれば，紀元125年頃の生まれで，170年以降に死亡したと古典文学史が伝える，紀元２世紀のローマ帝国に生きた歴史上実在の小説家だ。彼は『黄金の驢馬』という物語集を残していて，そのなかの一つに「キューピッドとサイキの物語」という作品がある。キューピッドと幸せな生活をおくっていた美しい娘サイキは，約束を破ってキューピッドの姿を見てしまったためにその愛を失うが，厳しい試練の放浪を経たのちに再びキューピッドの愛を得，ついに永遠の結婚に至る，という物語だ。こうして小説のテクストに沿って読み進んでいくと，ここに挿入された物語は，この小説の作者ペイターが想像力を駆使して生み出した虚構の物語などではなくて，作者以外の実在の作家の手になる作品がまずあって，その原作から採られた現実のテクストであることがわかる。しかも，この引用が恣意的あるいは不正確だなどといった疑念を抱かせるものはどこにも見うけられないのだ。

ところが次章の冒頭の語り手のコメントによれば，この物語は，主人公マリウスが読んだはずの原作「キューピッドとサイキの物語」をそのまま正確に小説のなかに引用したものではないことがわかる。マリウス自身がこれの読書体験を通して整理・編集したかたちの物語，マリウスの記憶のなかの物語なのである。しかも「その印象はいくらか原作と異なる」とい

う。

こうして，「キューピッドとサイキの物語」にあっては，引用という出来事そのものによって，しかも実在の作家の作品からの引用という事実によって，現実としてのテクスト性をあたかも自明のごとく印象付けているのだが，その一方で，それはあくまでも虚構の登場人物の内面の世界にしか存在しないテクストとしてその幻想性を暗示する視角が提示されている。一体，原作はどのようなものであったのか。マリウスは読んだことになっているから，もちろん原作を知っているはずだ。しかしわれわれはこの小説テクストのなかにその正確な姿を見付けることはできない。この物語は，その原作そのものとしての存在性が引用によって保証されているかに見えて，実はその不在性に脅える状況に置かれている。「その印象はいくらか原作と異なり，全体として荘重になった」というコメントも，この物語の原作からの距離・差異を強調することで，かえって，その必ず存在しているはずの原作にはますます辿り着きがたいことを叙述しているのである。

このコメントに続く言葉は，この引用テクストが，そしてわれわれ読者が置かれているこのような状況をさらに明らかにさせている ——

> アプレイウスの描いた子供らしい気みじかなキューピッドは，ダンテの枕もとに立って泣いた「面影おそろしき君」のようになり，すくなくともプラクシテレスの刻んだ『エロス』の成長した，男らしい，まじめさをそなえるようになった。 （第6章：I，92）

語り手は，マリウスの「記憶に残った」キューピッド像は，いかに「原作と異なっている」かを述べている。アプレイウスの原作に登場するキューピッドは，「子供らしい気みじかな」青年であったそうだが，これを確かめるテクストはここには得られない。あの長大な「引用」がこれを可能にする「原作」であったはずだが，またそう想定していたところ，この想定

を突き崩すべく，実はその「引用」なるものは，そこに表された物語のような，「そのようなもの」としてマリウスの「記憶」のなかに形成されたものを紹介しただけにすぎない，と告げられる。だからこの「引用」に登場したキューピッドは，すでに，「ダンテの枕もとに立って泣いた『面影おそろしき君』のよう」で，「プラクシテレスの刻んだ『エロス』の成長した，男らしい，まじめさをそなえた」青年になっていた，つまりそのような青年として初めから描かれていたのだ。

こうして，引用テクストがますます現実としての存在から，記憶，印象のなかのテクストといった幻の次元へとずらされていく方向のヴェクトルは，このキューピッドがダンテの『新生』第3章に登場する「愛の神」に譬えられることで，いっそう加速される。『新生』は，ダンテが「心地よいまどろみ」のなかで出会う「愛の神」について，「炎のような色をした雲」の姿で幻のごとく現われ，「面影おそろしき」顔つきをしていたと，描写している。だが紀元2世紀に生きるマリウスには，13—14世紀のイタリアに生きた詩人の作品に登場する人物などは，知るはずもない。マリウスがアプレイウスを読んでキューピッドを知ったとしても，その印象をダンテの「愛の神」のそのような描写と比較するとは，また絶対にできない相談だ。この譬え，この叙述は，14世紀以後の時点，例えば作者ペイターが生きた19世紀末の時点，に立つ語り手のみが可能とすることができるのだ。つまりここに展開しているキューピッド像をめぐっての感想は，マリウスの預かり知らぬことなのであって，語り手個人のコメント以外のなにものでもない。

また，プラクシテレスへの言及にしても，なるほどプラクシテレスは紀元前4世紀のギリシアの彫刻家であるからマリウスにはその作品を見知ることは不可能ではないにしても，この「若さと優雅を偏愛し，エロス，アフロディテがお気に入りであった」[3] との評判の彫刻家が刻む「男らしい，

まじめさをそなえたエロス（＝キューピッド）」 像を取り上げ，これとの類似性をマリウスが読んで得たキューピッド像とのあいだに認めるというのは，やはり相当の学識を備えていると推測される語り手の視角に基づくものであろう。

こうして引用された「キューピッドとサイキの物語」は，マリウスの眼の前に置かれたいわば歴史的存在としてのテクストから，マリウスの記憶のなかのテクストをへて，語り手の意識のなかのテクストへとその存在のありようがずらされていくのだ。

『マリウス』という一つのテクストが自らの内部に別のテクストの引用あるいはそれへの言及を含むというインターテクスチュアリティ intertextuality（間テクスト性）[4] の空間にあっては，こうして，引用テクストが現実のテクストとも幻想のテクストとも見えるという，自らの固定的な輪郭が溶解される場，いわば引用テクストの権威が脅かされる場が現出している。[5] ここには，引用を包含する主テクストと引用されたテクストとの間で相互に交渉し合うある動的な関係構造が出来上がっているのだ。

2

「キューピッドとサイキの物語」がインターテクスチュアルな空間に置かれたありようは，『マリウス』の様々な部分で見られるインターテクスチュアリティがその構造においてもっている基本的特質の，いわば両極を指し示しているように思われる ── 「現実のテクスト」（a real text）と「幻のテクスト」（a visionary text）。まず初めに，引用されたテクストが「現実」としてあるとは，一つの資料・記録としての機能を果たしていることだ。ドキュメントは，歴史的時間性と事実性に裏打ちされている。だからこれに接する虚構世界の登場人物に対して「本物らしさ」（authenticity）を付与することができるのだ。

この極を強く志向するインターテクスチュアリティは，この小説では大規模なかたちで現われているから，その場を特定すること自体はさほど難しくはない。例えば，主人公マリウスはローマに着いてすぐに哲学者皇帝マルクス・アウレリウスの講演を聴くことになるが，このストア哲学に基づく講演が10ページにわたって引用されている。これはアウレリウス自身の著『自省録』から採られたものだ（第12章）。ここで注目したいのは，引用の内容の意味はさておき，この引用という出来事が，虚構の人物マリウスに関して，アウレリウスの同時代人としての存在を印象づけ保証していることである。紀元161-80のあいだローマ皇帝の地位にあったアウレリウスの講演を聴講し，この経験の事実を証拠づけるかのようにその内容が紹介されることで，マリウスは紀元２世紀の世紀末に生きている青年としての本物らしさが付与されたのだ。ここに引用されたテクストが資料的記録としての機能を果たし，いま主人公のいる舞台に対して紀元２世紀という歴史的時間性を裏付けているのである。

このような機能をもつインターテクスチュアリティは，この他にも，例えば，皇帝宮殿で交されるアウレリウスとコルネリウス・フロントの会話（19世紀初頭に発見された二人の書簡集からの引用）（第13章）がある。さらに，フロントの講演「道徳の本性」（主として『自省録』からの引用）（第15章）。アウレリウスから浄書を依頼されてマリウスが読む原稿（『自省録』からの引用）（第18章）。アプレイウスの会話（『ソクラテスの神について』からの引用）（第20章）。アッピア街道で交されるルキアノスと青年ヘルモティムスの間の「幻ならぬ会話」（ルキアノスの作と信じられていた対話篇『ハルキュオネ』からの編集・引用）（第24章）。チェチリアの家で朗読される殉教者たちの手紙（ユーセビウス『教会史』からの引用）（第26章），等々。[6)]

これら，『マリウス』のなかに大掛かりに包含されたテクストは，歴史

的に実在する人物が書き残した著作，あるいは歴史上の資料からの引用である。しかもそれらの人物は，主人公マリウスの同時代人となっており，資料はマリウスの生きている時代のものである。マリウスは，これらの人物に会い，彼らの講演を聴き，著作物を読み，彼らの交す会話の場面に立ち会う，といったぐあいに，ここに引用されたテクストは，すべて2世紀末のローマ人と設定されたマリウスが経験する，そして経験できるテクストなのである。

このような大規模なインターテクスチュアリティの構造は，かつてA．C．ベンソンによって「読者の進む道に横断して掘られた大きな溝」だと評され，ここにこの小説の「欠点」を指摘されたことがある。[7] しかしこのような見方はその後退けられて，この注目すべき特徴をいかに意味付けるかに最近の研究の課題がかかっていたと言って過言ではなかろう。[8]

フィクション世界の主人公を現実世界の人物や資料と直面させて本物らしさを帯びさせるというのは，なるほど，小説一般において，とくにリアリズム小説においてよく行なわれる手法，さらに言えば歴史小説の常套手段であるかも知れない。[9] 『マリウス』は，紀元2世紀のローマが舞台が選ばれているから，確かに歴史小説のジャンルに属していよう。しかしこの小説にあっては，「わたし」,「われわれ」,「われわれ現代人」,「われわれの時代」,「この現代」といった語り手の立っている時点を指す言葉が頻出する事実が事情を異ならせている。ここでは，19世紀末に生きた作者ペイターに極めて近い位置に立つ語り手が，2世紀のローマ時代を現代の時点に引き寄せて，その時点から叙述するという姿勢が支配的にとられている。いわば，2世紀と19世紀のあいだの時間的距離が（さらには，ローマとイギリスの空間的距離も）無化されて，思想的・宗教的過渡期のローマがあたかもイギリス・後期ヴィクトリア朝時代についての叙述が進行するかのように描かれていく。ここで語り手のあの有名な告白を思い出しても

よい――「彼の時代とわれわれの時代はあまたの共通点をもち，あまたの困難と希望をわけもっていた。それゆえ私がここかしこでマリウスから近代人に移り，ローマからパリあるいはロンドンに居をうつすように見えることがあっても，読者はそれを許していただきたい。」（第16章：II, 14）

物語空間はいかにして確保されるのか。このような語り手の視角にすべてが収斂される姿勢の叙述が優勢な虚構世界の枠のなかでは，したがって，「引用」は，その姿勢のヴェクトルの干渉を受けつつもそれに抵抗するかたちで存在し，2世紀という歴史的時間性を強く訴えている数少ない要素の一つとなっている。逆にいえば，ローマのマリウスに本物らしさを付与する「引用」は，フィクション世界の登場人物を客体化し，主人公の属する時点と語り手の立つ時点とのあいだの時間的距離を確保し，物語空間を立体化するための，切実でかつ必須の手法であったのだ。引用されたテクストが，あたかもマリウス自身の物語についての叙述から，さらには語り手の視角から自立して存在しているかのように見えることがあるとすれば，それはこの事情によるものであろう。

3

他方の極，引用あるいは言及されるテクストが，登場人物に本物らしさを保証する機能を失って「幻のテクスト」に変容されて行くなかでは，現実そのものを示すのでなく，現実についての意識を伝える叙述が進行する。ここに歴史的時間性が無視され解体される，いわば時代錯誤的叙述状況が現出してくる。

例えば，マリウスがアウレリウスの大凱旋を目撃する描写はこうなっている――

マリウスは（略）たまたま皇帝マルクス・アウレリウスの凱旋式を見

た。場所は彼が初めてローマにきたとき，皇帝が厳かに威儀をととのえて都にお帰りになるのを見たのと，ほとんど同じ場所であった。（略）ただこのたびのは「大」凱旋式であった。（略）捕虜のなかにはわれわれの祖先が，征服されたドイツの代表者として，後期ローマの彫刻にしばしば現われるような姿をして歩いていた。（略）たしかに彼には『瀕死のガリア人』に見られるような優雅なところはなかった。 （第27章：II, 197）

マリウスが見物できたこの大凱旋式は，実は176年の暮れのことであったと確定されている。それ故，ここのマリウスをめぐっての叙述では歴史的時間性が守られている。ところが戦地の敵国から連れ帰った捕虜の描写になると，そのなかに「われわれの祖先」(our own ancestor) が，すなわち語り手と同じ祖国の，おそらくイギリス人と推測してよい捕虜が「歩いていた」とある。「見た」,「同じ場所であった」,「『大』凱旋式であった」,そして「歩いていた」とあるから，いまここで見物しているのはマリウス以外の誰でもない。にもかかわらず彼の目撃したのは「われわれの祖先」である。これは，19世紀末にいる語り手の視線が捉えた光景だ。2世紀のローマにいるマリウスの経験および認識の範囲外にある光景であって，ここには歴史的時間性を無視した叙述が実行されているのである。

また，この捕虜の姿と「後期ローマの彫刻」との比較も，そして，紀元前3世紀後半の作と伝えられ，マリウスの住むローマのカピトリヌス博物館に所蔵されていたとは言うものの，あの『瀕死のガリア人』との比較もまた，やはり語り手の視角のなかにおいてのみ可能であったろう。

こうして，ここでは叙述における時間性（temporality）の移行が行なわれている。むしろ，その一方でマリウスの行動の歴史的時点がしっかり確保されているのだから，このインターテクスチュアルな空間においては

二種類の時間性が同時平行して存在している，と言ってよかろう。これこそ，『マリウス』の叙述の特質に触れるもので，そのテクスチュアについて指摘される不均質性は，ここに由来するものであろう。

例えば，マリウスが，ストア哲学を実践するアウレリウスと，キリスト教に帰依した青年騎士コルネリウスとの表情を見比べてその違いを述べる描写がある——

> アウレリウスにあっては（マリウスはその対照に気づかざるをえなかった）いつも変らぬ表情であり，本来の容貌であった。実際コルネリウスの明るい表情は，ダンテが完全な人の祝福された霊に見いだした悦びに劣るものでなく，それに似たものを求めれば，「はるかなる国」から人の顔にさす光の反射のように，われわれはジオットからラファエルロにいたって完成する作品のうちに辿らねばならないであろう。このような死から救われた人びとの晴やかさ，永続的な明るさにくらべると，ギリシャ人の有名な「快活さ」の最もすぐれたものも，深みのない気楽な青年の一時的な光のきらめきにすぎない。
>
> （第18章：II，52）

ストア哲学の限界に気づいたマリウスは，アウレリウスの表情に「ときどきほがらかな顔つきになる」ことはあっても「真の快活さに欠ける」のを見てとり，コルネリウスの表情と比較する。「その対照に気づかざるをえなかった」とあるように，マリウスは確かにその相違を認識することができた。ここのところの叙述は，マリウスの視角に基づいている。虚構の登場人物コルネリウスも，歴史的実在の人物と同じ時間的・空間的舞台に現われ，そこをマリウスの視角に捉えられることで，二人はともにいま本物らしさが与えられている。ところが次の文章に移ると，突如ダンテが引き合いに出され，コルネリウスの「明るい表情」は，『神曲—天国篇』に描

かれる「死から救われた人びと」と比較され，さらに，ジオット，ラファエルロの画に描かれた人々との比較においても叙述される。言うまでもなくこの比較は，マリウスの理解の範囲外にあって，ルネサンス以降の時点に立ってのみ可能である。それは，「われわれは……辿らねばならないであろう」と，語り手が顔をのぞかせていることによっても確認できよう。その上，古代ギリシャの「快活」な青年の表情とも比較されている。ここの叙述は，こうして，マリウスとコルネリウスの生きる2世紀の時間性に基づいて始まるものの，ダンテの14世紀，ジオット，ラファエルロのルネサンス，古代ギリシャの紀元前の世紀が現われ，大きく4つの時間性が同時平行的に共存しているのだ。そしてもう一つ，語り手の立つ時点が，この複合的な時間性の創出，発動を可能にさせている。

このようなインターテクスチュアリティの叙述空間における不均質さは，次のような描写によっていっそうその基本性が明らかにされよう。チェチリア家の教会をコルネリウスと訪れたあと，マリウスは——

> マリウスは，（略）これから十数世紀の後，ジオットから，もっともよい純粋な青年時代のラファエルロにいたる彼の後継者たちによって，芸術的理想と考えられることになる，あの新しく生まれかわった人間性のタイプが世界に現われるのを見た。　（第22章：II, 109–110）

2世紀にいるマリウスがラファエルロたちが「芸術的理想と考えた……人間性のタイプ」を「見た」とは，厳密には有り得ないことで，確かに時代錯誤的だ。だがこのような二つのあい異なる時間性が一つの視角のなかに収められた叙述こそ，この小説中にしばしば確認できる特徴なのである。

この重層的な視角は，結局は語り手のものだが，しかし考えて見るとエッセイにおいて行なわれる叙述に似ている。先ほどの引用に見た，ラファエルロに言及しつつ展開した叙述は，作者ペイターの『雑纂』（*Miscel-*

laneous Studies）に収録された「ラファエルロ論」で実行されてもほとんど違和感を感じさせないだろう。ギリシャ人の精神性「快活さ」への言及は，「ヴィンケルマン論」の一節と見ても決しておかしくはない叙述である。エッセイとくると，この小説には，アウレリウスの著述について，「実際それは近代のエッセイストの態度であった」というコメントがある。「エッセイストは真理を理解するのにあたって，（略）すくなくともその途上で光を意識し，これを認めて記録せずにはおれない人である」（第18章：II，47）とあとに続くのだが，まさしく『マリウス』の特徴的な叙述は，この「意識」が捉えた「途上の光」を「記録せずにはおれず」記録しようとする姿勢に通底するものがあろう。

重層的な時間性の視角は，外界の風景を見る叙述にも貫かれている。ローマに着いた翌朝，マリウスはこの都市をこのように見る――「朝早く眼をさまし」，「好奇心にかられて部屋から部屋をあるきまわり」，「カーテンとよろい戸をあけ」，「さわやかな朝のバルコニーに出た」。このマリウスの属する歴史的時間性に基づく叙述は，「古い異教世界の咲きほこる花であるローマ」，「歴史上のいかなる時代においてもこのときほど見るべき価値のあることはなかった」ローマの景観を描写し始めると，それはマリウスの眼に映った風景であるはずなのに，それにとって代わって別の時間性に導かれた叙述が出現してくる――

> 偉大な再建者ネロ以前の時代の多くのものも，ちょうどルイ十四世のパリにみられる中世都市の遺物のように，古めかしくも奥ゆかしい姿を残していた。ネロ自身の時代のものも，ルイ十四世の時代のものがわれわれ現代人にたいして持つような，古めかしさと絵画的な興味を持つようになった。そしてまた一方，古風なハドリアヌス帝の時代の精巧な建築を，われわれ自身のゴシック復興のすぐれた建築になどら

えても，おそらくゆきすぎではなかろう。　（第11章：II, 172-73）

ここに窺える時間性を古い順に列挙すれば，ネロ，ハドリアヌス帝，マリウス，中世，ルイ十四世，ゴシック復興，われわれ現代，のそれぞれの時代となろう。マリウスが初めて眼にする都市ローマは，こうしてマリウスにとっての過去と現在と末来の時間性が同時平行的に重なりあう視角のなかで叙述されているのである。

4

『マリウス』におけるヴィジョンの出現は，おそらくこの重層的に錯綜するいくつかの時間性をそのまま総体として収めるこの視角のなかをおいては他にありえないであろう。この視角は，引用あるいは言及されるテクストにあって，その歴史的時間性に基づく本物らしさを登場人物に保証する現実としてのテクストと，語り手の意識へと収斂されるなかでその歴史的時間性が解体される幻としてのテクストとが交錯する，インターテクスチュアリティの場において最も鮮明，強烈に啓示される。ペイターはこの小説を書く以前に，「現在についての強烈な意識のなかに過去と未来を吸いこんでしまうような瞬間」，「そのような理想の瞬間」を提示することに芸術の理想があることを「ジョルジョーネ派論」（'The School of Giorgione'）（1877）で述べていた。[10]『マリウス』におけるインターテクスチュアリティの空間に現出するこの重層的時間性の視角こそ，その「理想の瞬間」の提示を可能にするものではあるまいか。

注

1) Walter Pater, *Marius the Epicurean* (1910; rpt. Oxford: Blackwell, 1973), I, 92. 以下，この作品からの引用はこの版により，章，巻，ページ数のみを記す。なお訳文は，工藤好美訳（南雲堂，1985）を原則とし，

引用等の関係で改変した場合もある。

2) Cf. Gerald Monsman, *Walter Pater's Art of Autobiography* (New Haven: Yale UP., 1980), pp. 52–54.

3) Bernard Ashmole, 'Praxiteles,' in *Encylopedia of World Art,* Vol. XI (London: McGraw-Hill, 1966), p. 564.

4) 'intertextuality' についての metacriticism はここでは行なわない。これについては Jonathan Culler, 'Presupposition and Intertextuality,' in *The Pursuit of Signs* (London: RKP, 1981) が有益。また, Richard Fleming and Michael Payne, eds., *Criticism, History, and Intertextuality* (Lewisburg: Bucknell UP., 1988); Michel Gresset and Noel Polk, eds., *Intertextuality in Faulkner* (Jackson: University Press of Mississippi, 1985) を参照。なお 'intertextuality' の参考文献は, Patrick O'Donnell and Robert Con Davis, *Intertextuality and Contemporary American Fiction* (Baltimor: The Johns Hopkins UP., 1989) 所収の 'A Selected Bibliography' に詳しい。

5) Cf. Ian Small, 'Introduction,' to Walter Pater, *Marius the Epicurean* (Oxford: Oxford UP., 1986), p. xv.

6) これらの出典については, 前出の, 工藤の訳注, Ian Small の 'Explanatory Notes,' そして Michael Levey, 'Notes,' to Walter Pater, *Marius the Epicurean* (Penguin Books, 1985) が有益。

7) A. C. Benson, *Walter Pater* (London: Macmillan, 1906), p. 92.

8) Cf. Billie Andrew Inman, 'The Organic Structure of *Marius the Epicurean,' Philological Quarterly,* XLI, ii (1962), 475.

9) Cf. Avrom Fleishman, *The English Historical Novel* (Baltimore: The Johns Hopkins UP., 1971), pp. 149–78; Bernard Richards, 'Stopping the Press in *Marius,' English Literature in Transition,* XXVII, ii (1984), 90–99.

10) Walter Pater, *The Renaissance* (1910; rpt. Oxford: Blackwell, 1973), p. 150.

付記。この小論は, 日本ペイター協会　第26回研究発表・講演会 (1987年10月24日, 於愛知大学) において「*Marius the Epicurean* における intertextuality の問題」と題して発表した草稿に基づくものである。

(文学部助教授)